

小峰城跡発掘調査報告書

— 白河駅前区画整理事業に伴う調査2 —

2023年3月

白 河 市

小峰城跡発掘調査報告書

— 白河駅前区画整理事業に伴う調査2 —

ごあいさつ

白河市は、東北の入り口にあり、古くは白河の関が設けられるなど、交通の要衝でもありました。

昭和50年代の高速交通網の整備とともに、郊外へ市街地が進むなど、まちの環境も大きく変化しました。

こうした背景のもと、JR白河駅前を中心とした中心市街地は、空洞化が目立つようになり、その対策が課題となったことから、市では白河駅前の約5.5ヘクタールを対象に区画整理事業を行い、都市環境の整備と中心市街地の活性化を促すこととしました。

白河駅前は、江戸時代には小峰城の三之丸にあたり、武家屋敷が広がっていた地域であり、平成元年に事業が起工されて以降は、区画整理事業の進捗に合わせながら、埋蔵文化財の調査を進めてまいりました。

今回報告いたしますのは、平成6年度に実施した、小峰城三之丸の調査成果になります。調査では、溝跡や井戸跡などの存在が明らかとなり、屋敷地内の状況の一端を明らかにすることができました。

本報告書が、小峰城理解の一助として、ご活用いただけますことを願うものです。

最後に、本報告書刊行に至るまでにご協力いただきました関係各位に、心より感謝申し上げます。

令和5年3月

白河市長 鈴木 和夫

例 言

1. 本書は、平成6年度に実施した、白河駅前区画整理事業に伴う、白河市郭内（現大手町）における小峰城の発掘調査報告書である。
2. この調査は、区画整理事業に伴い記録保存を目的として実施した発掘調査である。
3. 調査は、白河市教育委員会が主体となり実施した。
4. 発掘調査の費用は市費によるが、資料整理・報告書刊行は国庫補助事業で行った。
5. 本報告書の執筆・編集は、白河市建設部文化財課 鈴木 功が行った。
6. 報告書作成にあたり、資料整理は仁平幸江、柴原ルミ子が行った。
7. 出土遺物については、三春町歴史民俗資料館長平田植文氏より御教示いただいた。
8. 発掘調査における記録および出土遺物については、すべて白河市で保管している。

凡 例

1. 本報告書の遺構図の用例は以下のとおりである。
 - (1) 図中の方位は、磁北を示す。
 - (2) 遺構平面図は、1/60の縮尺で採録した。
 - (3) 遺構断面図の数値は、海拔高度を示す。
2. 遺物図の用例は以下のとおりである。
 - (1) 遺物図は、1/2、1/3、1/5の縮尺で掲載した。
3. 図中の略号は以下の通りである。

SK-土坑、SD-溝跡、SE-井戸跡、P-ピット
4. 表の用例は以下のとおりである。
 - (1) ()は推定値、< >は残存値を示す。

目 次

第1章 城郭	1
第2章 調査	
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査要項	3
第3節 調査経過	3
第4節 調査方法	4
第3章 調査成果	
第1節 遺構検出状況と基本層序	5
第2節 遺構と遺物	5
第4章 まとめ	

挿図・表・写真図版目次

[挿図]

図1 小峰城跡の範囲	2	図8 3号溝跡出土遺物(1)	17
図2 白河城下全景	2	図9 3号溝跡出土遺物(2)	18
図3 遺構全体図	11・12	図10 3号溝跡出土遺物(3)	19
図4 土坑、井戸跡断面図	13	図11 3号溝跡出土遺物(4)	20
図5 基本層序、溝跡断面図	14	図12 4号溝跡出土遺物(1)	21
図6 4号土坑出土遺物(1)	15	図13 4号溝跡(2)、ピット、遺構外出土遺物	22
図7 4号土坑出土遺物(2)	16		

[表]

表1 出土遺物観察表(1)	23	表2 出土遺物観察表(2)	24
---------------	----	---------------	----

[写真図版]

図版1 小峰城跡と中心市街地	29	図版5 1号～5号土坑	33
図版2 調査区全景(1)	30	図版6 6号～9号土坑、1号・3号溝跡	34
図版3 調査区全景(2)	31	図版7 井戸跡	35
図版4 基本層序	32	図版8 5号溝跡	36

第1章 城郭

白河市の中心市街地一帯は、西に聳える奥羽山脈より東に向かって樹枝状に派生した丘陵と、阿武隈川や谷津田川などの河川によって形成された河岸段丘が発達している。

小峰城跡は、東西に延びる標高370mほどの独立丘陵と、阿武隈川や谷津田川により形成された標高357mほどの河岸段丘上に立地しており、本丸が丘陵上、二之丸および三之丸は河岸段丘上に位置する。

外堀より内側の範囲は、最大幅東西850m、南北650mほどで、現在この範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地として登録している。このうち、本丸・二之丸、東側丘陵部にかけての約16.3haが国史跡の指定範囲となっている。

小峰城の成立は、文化2年(1805)年に編纂された『白河風土記』によれば、興国～正平年間(1340～69)の頃、白河庄を治めていた結城宗広の嫡男親朝(別家小峰家を興す)が築城したことに始まるとされる。結城氏時代の縄張りの姿を現状で確認することはできないが、本丸の東側に延びる丘陵や二之丸部分での発掘調査時に、中世の遺構・遺物の存在が確認されている。

天正18年(1590)、豊臣秀吉による奥州仕置により改易され、白河結城氏の支配は終焉を迎える。奥州仕置の後、蒲生氏郷・上杉景勝・蒲生秀行が会津を治めることとなる。白河には、各時代に城代が置かれ、会津の支城時代を迎える。

寛永4年(1627)、丹羽長重が棚倉より10万余石で入封し、白河藩が成立する。長重は、幕命により同6年から約4年の歳月をかけて城郭の大改修を行う。

正保元年(1644)に藩主榊原忠次が幕府に提出した「奥州白河城絵図(正保城絵図)」から長重による改修後の姿を確認することができる。縄張りには、本丸の南側に二之丸、二之丸の東・南に元三之丸、元三之丸を取り囲むように三之丸が配される梯郭式平山城である。

長重の改修は、阿武隈川の河道の変更と屋敷地の確保、本丸・二之丸を総石垣、三之丸や外郭の主要な部分に石垣を多用した城郭として改修されたことが大きな特徴と言える。石垣を多用した城郭への変貌は、伊達、上杉、佐竹といった北奥羽の外様大名への、押えの城との位置づけがあったことが大きな要因と考えられる。

丹羽氏、松平(榊原)氏、本多氏、松平(奥平)氏、松平(結城)氏、松平(久松)氏、阿部氏と7大名21代にわたる居城となっていたが、慶応2年(1866)、阿部氏の棚倉移封後は、二本松藩丹羽氏の預かることとなり、最終的には慶応4年(1868)の戊辰戦争白河口の戦いにより焼失落城した。

明治以降、本丸・二之丸は学校用地や公園として利用が図られた。三之丸の多くは民間に払い下げられ、鉄道の敷設や駅舎が建設されるなど、近代のまちへと発展を遂げていった。

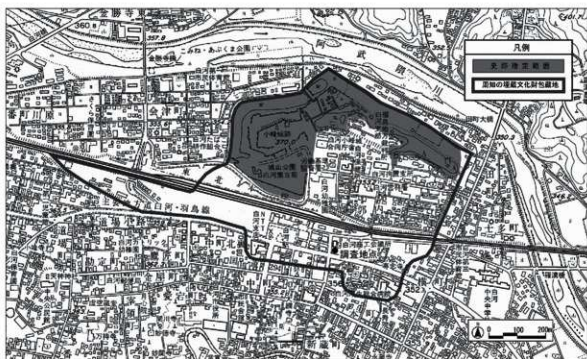


図1 小峰城跡の範囲

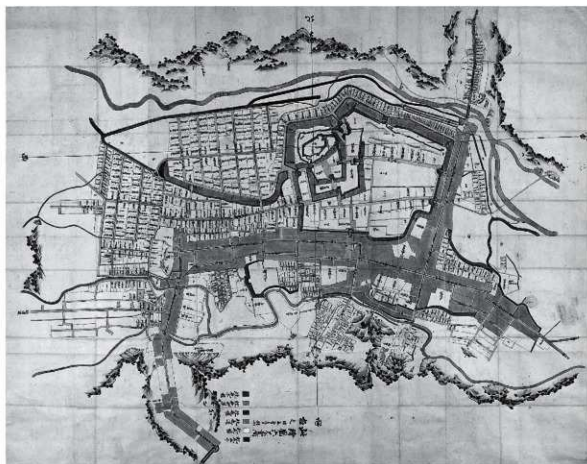


図2 白河城下全図

第2章 調査

第1節 調査に至る経過

昭和56年に、JR白河駅前を中心とした約5.5ヘクタールを対象に「白河駅前土地区画整理事業」が決定され、平成元年から工事に着手した。

事業対象範囲が広範囲であり、また絵図面との照合等から小峰城三之丸跡から旧城下町までが含まれることから、埋蔵文化財として調査等の対象範囲をどの範囲までとするか、福島県教育委員会と協議が行われた。

事業対象区域の南側は、中心市街地として国道294号沿いに商店街が広がっており、現実的に発掘調査を行える環境にはないと判断から、埋蔵文化財包蔵地としての「小峰城跡」の範囲を外堀の外縁までとした。

これを受け、埋蔵文化財の保存協議が行われたが、区画整理事業という性質上、現状での保存は難しいとの判断から、工事に先立って記録保存を目的とした発掘調査を実施することとした。

今回の調査地点は、江戸時代の文化年間に描かれた「白河城下全図」では、三之丸の作事方が存在した一角にあたる。

第2節 調査要項

遺跡名	小峰城跡
所在地	白河市郭内222-69（現白河市大手町）
調査期間	平成6年6月27日～7月26日
調査面積	263.55㎡
調査主体	白河市教育委員会
調査員	白河市教育委員会社会教育課 鈴木 功

第3節 調査経過

平成6年6月27日より、調査対象地区の南東部について表土除去作業を開始する。28日からは、作業員を導入し、遺構検出作業を行う。29日、雨のため作業中止。30日、検出された土坑やピットへの掘り込みを行う。7月1日、雨のため作業中止。4日から、土坑・溝跡の掘り込みを行う。

6日、4号土坑を完掘し全体の清掃を行う。7日には3号溝跡検出を行うが、検出面から土師質

土器が多く存在することが確認できた。8日からは、新たに南西調査区の表土除去を行い、引き続き南西調査区遺構検出作業を行う。4号溝跡を完掘したが、底面において1号井戸跡の存在を確認する。1号井戸跡、3号溝跡、8号土坑などの掘り込みと、平面図作成、全景写真を撮影する。



作業風景

14日から南西調査区の埋め戻しとともに、新たに北側調査区の表土除去を開始する。北側調査区で検出された4号土坑の一部と5号溝跡の掘り込み。18日、雨のため作業中止。19日から25日まで、4号・8号土坑、5号溝跡の掘り込みや図面作成・全景写真の撮影を行う。26日、重機にて調査区全体の埋め戻しを行い、調査を終了する。

第4節 調査方法

表土置き場の関係から、調査区を3分割して調査を行った。表土の掘り込みは、重機を用いて行った。遺構検出作業および遺構の掘り込み作業については、手作業で行った。また、井戸跡についてはある程度までの掘り込みと記録化を行った後、重機にて遺構を断ち割り、下部の状況確認を行った。

調査記録は、平面図・断面図を1/20、1/30の縮尺で作成した。写真撮影は、35mmモノクローム・カラーリバーサルフィルムを用いて行った。

第3章 調査成果

第1節 遺構検出状況と基本層序

遺構検出状況 検出された遺構は、土坑9基、井戸跡2基、溝跡5条、ピット43基を数える。遺構は、基本層のIV層上面において検出している。

基本層序 調査区の基本層序は7層確認している。I～III層については、近代以降の堆積層である。西側壁面においては、表土直下に石積みの存在を確認している。出土遺物には、現代のものが含まれている。

IV層上面ないしIV層中において遺構の平面形を確認している。V層・VI層は、調査区の西側及び南側で確認されている。VI層は、基盤層となる褐色層である。

第2節 遺構と遺物

1号土坑 SK01 (図3・4、図版5)

調査区南東寄りに位置し、V層上面において検出した。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は東西58cm、南北64cm、深さ10cmを測る。遺構内には、6～12cm大の礫が底面上に敷き詰められた状態で存在していた。堆積土は、暗褐色シルト1層である。

遺物の出土はない。

遺物の出土はなく、遺構の年代については具体的に示すことはできないが、江戸時代に位置付けられる他の土坑と堆積土が共通していることから、江戸時代の遺構と判断した。

2号土坑 SK02 (図3・4、図版5)

調査区南東寄りに位置し、V層上面において検出した。3号溝跡と重複しており、本土坑が新しいことを平面において確認している。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は東西62cm、南北47cm、深さ13cmを測る。堆積土は1層で、暗褐色シルトと黄褐色シルトの混ざり合った土である。

遺物は、土師質土器が16片出土しているが、すべて小片のため図示できなかった。確認できた範囲では、ロクロ成形のものが数点確認できた。

出土遺物から遺構の時期を特定できないが、土師質土器の特徴から江戸時代の遺構と判断される。

3号土坑 SK03 (図3・4、図版5)

調査区南東寄りに位置し、V層上面において検出した。3号溝跡と重複しており、本土坑が新し

いことを平面において確認している。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は東西105cm、南北104cm、深さ24cmを測る。北側を除く三方の壁面には、量の多少はあるが8～15cm大の礫が貼り付いた状態で遺存していた。堆積土は、暗褐色シルト1層である。

遺物は、陶磁器3片、土師質土器108片が出土しているが、いずれも小片のため図示することはできなかった。確認できた範囲では、瀬戸の灰釉皿とロクロ成形の土師質土器の存在は確認できた。

出土遺物からは、遺構の明確な時期は特定できないが、江戸時代の遺構と判断される。

4号土坑 SK04 (図3・4・6・7、表1、図版5)

調査区東寄りに位置し、V層上面において検出した。遺構の北東部は調査区外へ延びている。3号溝跡と重複しており、本土坑が新しいことを平面において確認している。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は確認範囲で東西442cm、南北476cm、深さ70cmを測る。堆積土は、北側の調査区境の壁面での確認で、暗褐色シルトないし褐色シルトが3層堆積していた。

遺物は、陶磁器116片、土師質土器107片、瓦質土器10片、鉄製品3点、石製品1点、瓦3片が出土している。このうち12点を図示した。

図6-1・2は筒形の碗、3・4は陶器の香炉、5は志野の鉄絵皿、6は陶器の大皿、7は四耳壺である。4・6は再酸化のため、文様が部分的に消失している。

図7-8は丹波の挿鉢、9は小型の土師質土器、10は用途不明、11は平瓦、12は北宋銭の「聖宋元寶」で、初鑄年代は1101年である。

遺構内からは、比較的多くの遺物が出土している。17世紀前半代の志野の鉄絵皿はあるものの、その他は比較的新しい要素のもので、18世紀代のものが含まれていることから、本遺構の年代も18世紀代のものと判断される。

5号土坑 SK05 (図3・4、図版5)

調査区南西寄りに位置し、V層上面において検出した。ピットと重複しており、本土坑がピットよりも古いことを平面において確認している。平面形は隅丸長方形を呈しており、規模は東西50cm、南北96cm、深さ15cmを測る。堆積土は、暗褐色シルト1層の堆積である。

遺物は、陶器1片、土師質土器7片が出土しているが、いずれも小片のため図示することはできなかったが、土師質土器の多くはロクロ成形のものであった。

出土遺物からは、遺構の明確な時期は特定できないが、江戸時代の遺構と判断される。

6号土坑 SK06 (図3・4、図版6)

調査区南西寄りに位置し、V層上面において検出した。平面形は楕円形を呈しており、規模は東西56cm、南北50cm、深さ13cmを測る。堆積土は、暗褐色シルト1層の堆積である。

遺物は、土師質土器が2片出土している。いずれも小片のため図示することはできなかったが、

ロクロ成形のものであった。

出土遺物からは、遺構の明確な時期は特定できないが、江戸時代の遺構と判断される。

7号土坑 SK07 (図3・4、図版6)

調査区南西寄りに位置し、V層上面において検出した。平面形は楕円形を呈しており、規模は東西67cm、南北52cm、深さ14cmを測る。堆積土は、暗褐色シルトと黄褐色土が混ざり合った土である。

遺物は、土師質土器が9片出土している。いずれも小片のため図示することはできなかったが、多くはロクロ成形のものであった。

出土遺物からは、遺構の明確な時期は特定できないが、江戸時代の遺構と判断される。

8号土坑 SK08 (図3・4、図版6)

調査区のはほぼ中央に位置し、V層上面において検出した。攪乱により北側が壊されている。3号溝跡と重複しており、本遺構が新しいことを平面において確認している。平面形は長楕円形を呈しており、規模は東西86cm、南北は確認範囲で250cm、深さ60cmを測る。堆積土は、黒褐色シルト、暗褐色シルトが3層堆積している。

遺物は、陶器1片、瓦1片が出土している。いずれも小片のため図示できたものはないが、いずれも江戸時代に位置付けられるものであり、遺構も江戸時代のものと判断される。

9号土坑 SK09 (図3・4、図版6)

調査区の北西に位置し、V層上面において検出した。遺構の一部は、西側の調査区外まで延びている。4号溝跡と重複しており、本土坑が古いことを断面において確認している。確認範囲では、平面形は楕円形を呈するものと考えられ、確認範囲での規模は、東西が確認範囲で50cm、南北72cm、深さ20cmを測る。堆積土は、暗褐色シルト1層である。

遺物の出土はないが、江戸時代に位置付けられる他の土坑と堆積土の共通性や、4号溝跡との重複関係から、江戸時代の遺構と判断される。

1号井戸跡 SE01 (図3・4、図版2・7)

調査区の西側、4号溝跡の底面において平面形を確認した。遺構の西側は調査区外へ延びている。4号溝跡と重複しており、本遺構が古いことを平面および断面において確認している。

検出面で、円形に川原石が配置されていることから、井戸跡の可能性が考えられた。平面形は円形を呈し、確認範囲で東西78cm、南北114cmを測る。4号溝跡の底面での確認であり、地表面からはかなりの深さに存在する。西側が遺構外まで延びており、掘り込みを開始して間もなく西側の調査区境の堆積土が崩落したため、作業上の安全面を考慮し、およそ50cm掘り下げたところで人手による調査を断念した。

平面図の作成や写真撮影を終了したのち、重機にて裁ち割りを行い検出面から約3mまで確認したが底面には至らなかった。

遺物は、瓦質土器が1点出土しているが、図示できなかった。

出土遺物から年代の特定はできないが、4号溝跡との重複関係から江戸時代の遺構と判断した。

2号井戸跡 SE02 (図3・4、図版7)

調査区の北側に位置する。5号溝跡の上面において確認した。5号溝跡よりは新しいことを平面において確認した。遺構の北側は調査区外へ延びている。

途中まで手作業で掘り込みを行ったが、下部は重機による裁ち割りで確認している。

平面形は楕円形を呈し、東西94cm、南北は確認範囲で124cm、深さ250cmを測る。下部においてのみ、厚さ106cm暗褐色シルトの堆積を確認している。遺物の出土はない。

遺物の出土もなく年代の特定はできないが、5号溝跡との重複関係から江戸時代の遺構と判断した。

1号溝跡 SD01 (図3・5、図版6)

調査区の南東に位置し、V層上面において検出した。南北に延びる溝跡で、遺構の大半は東側および北側の調査区外まで延びている。4号土坑、2号溝跡と重複しており、本溝跡が4号土坑よりも古く、2号溝跡よりも新しいことを平面および断面において確認している。

確認範囲での規模は長さ346cm、幅34cm、深さ42cmを測る。堆積土は、暗褐色および黒褐色シルトの2層確認しているが、あくまでも溝上部での確認である。

遺物は、堆積土中から土師質土器82片、銭貨1点が出土しているが、小片のため図示できたものはなかった。土師質土器については、ロクロ成形のものが多くみられた。

出土遺物から遺構の時期は特定できないが、他遺構との切り合い関係などから、江戸時代に位置付けられる。

2号溝跡 SD02 (図3・5、図版3)

調査区の南に位置し、V層上面において検出した。東西に延びる溝跡で、遺構の東側は調査区外まで延びている。また、西側はL字状に北側に折れ、取束している。1号溝跡、数基のピットと重複しているが、いずれの遺構よりも本溝跡が古いことを平面において確認している。

確認範囲での規模は、長さ456cm、北側に折れた部分120cm、幅38cm、深さ12cmを測る。堆積土は、暗褐色シルト1層である。

遺物の出土はない。

出土遺物もなく、遺構の時期は特定できないが、他遺構との切り合い関係などから、江戸時代に位置付けられる。

3号溝跡 SD03 (図3・5・8～11、表1・2、図版6)

調査区の南に位置し、V層上面において検出した。東西に延びる溝跡で、遺構の東側は、調査区外まで延びている。また、西側は4号溝跡に切られている。2号～4号・8号土坑、1号・4号溝跡、数基のピットと重複しているが、いずれの遺構よりも本溝跡が古いことを平面において確認している。

確認範囲での規模は、長さ850cm、幅110～120cm、深さ44cmを測る。堆積土は、暗褐色・黒褐色シルトが3層堆積している。

遺物は、堆積土内から土師質土器4,594片が出土している。土師質土器は、全体の形状が明らかなのが多く、計40点を図示した。なお、図示できなかったもののうち、底部の遺存度が50%以上のものの数量を確認したところ、ロクロ成形の小型品75点、大型品92点が存在していた。大量の土師質土器が廃棄されたものと考えられる。

図8-13～24、図9-25～32、図10-33～39、はロクロ成形で、口径が8cm、底径が5cm、高さが2cmほど(13～27)と、口径が13～14cm、底径が7cmほど、高さが3～4cmを測る(28～39)ものに分かれる。図10-40、図11-41～52は、非ロクロ成形のもので、丸底を呈している。法量は、口径12～13cm、高さ3cmほどを測る。外面体部には、粘土紐の痕跡がみられるものも存在する。

出土遺物は土師質土器で、その特徴から、ロクロ成形の小型品などは17世紀代と考えられ、非ロクロ成形の丸底のものは17世紀代以前となる可能性が考えられるものである。現段階では、遺構の年代は江戸時代ないしそれ以前の可能性があるものと判断した。

4号溝跡 SD04 (図3・5・12・13、表2、図版2)

調査区の西に位置し、V層上面において検出した。断面では、IV層上面から掘り込まれていることが確認できた。南北に延びる溝跡で、遺構の西側・南側は、調査区外まで延びている。9号土坑、3号・5号溝跡、1号井戸跡と重複しており、いずれの遺構よりも本遺構が新しいことを平面および断面において確認している。

確認範囲での規模は、長さ832cm、幅102cm、深さ78cmを測る。堆積土は、底面近くに暗褐色シルトの堆積が確認できるが、1層は赤変した石炭カス層であった。

遺物は、堆積土内から陶磁器243片、土師質土器8片、瓦質土器2片が出土している。このうち、陶磁器11点を図示した。

図12-53～58、図13-59・60は磁器、61・62は砕石手、63は陶器である。53・54は丸碗、55は輪花皿、56・57・59は稜花皿、58は皿、60は小杯、63は挿鉢である。

出土遺物は17世紀後半代や18世紀代に位置付けられる肥前の染付や19世紀代の会津本郷産砕石手である。

遺構の大半が赤変した石炭カスであったことなどからすれば、遺構は明治20年代以降まで開口していたと考えられ、少なくとも幕末頃に遡る可能性も考えられる。

5号溝跡 SD05 (図3・5、図版8)

調査区の北に位置し、V層上面において検出した。東西に延びる溝跡で、遺構の東西および北西側は、調査区外まで延びている。4号溝跡、2号井戸跡と重複しており、いずれの遺構よりも本遺構が古いことを平面および断面において確認している。

確認範囲での規模は、長さ740cm、幅136cm、深さ146cmを測る。堆積土は8層に分かれ、暗褐色や黒褐色シルトを基本としている。確認範囲では断面形は、V字状を呈している。

遺物は、堆積土内から陶磁器4片、銅製品1点、石製品2点が出土しているものの、いずれも小片のため図示することができなかった。

出土遺物が少なく、遺物から年代を特定することはできないが、遺構間の切り合い関係やV字に近い遺構の断面形状などからすれば、戦国時代頃まで遡る可能性が考えられる。

ビット (図3、表2、図版2・3)

調査区の中央から南側にかけて、径20～30cm、深さ20～30cmほどのビットが50基確認されている。確認面は、他遺構と同じV層上面である。土坑や溝跡との重複もみられる。

遺物は、P29・35・45から磁器、土師質土器、瓦質土器が数片出土している。図13-64は、磁器の小型瓶である

遺構については、堆積土の共通性などから、江戸時代のもつと判断される。

遺構外出土遺物 (図13、表2)

遺構に伴わずに出土した遺物には、陶磁器244片、土師質土器350片、瓦質土器12、鉄製品2点、銅製品1点、石製品1点、瓦27片がある。大半が小片であり、図示できたものは少なかった。

図13-65は、相馬産の丸碗、66は土師質土器の灯明具、67は火消し壺の蓋、68は身である。69は陶器の皿である。

いずれも、江戸時代の遺物と考えられる。



图3 遺構全体図

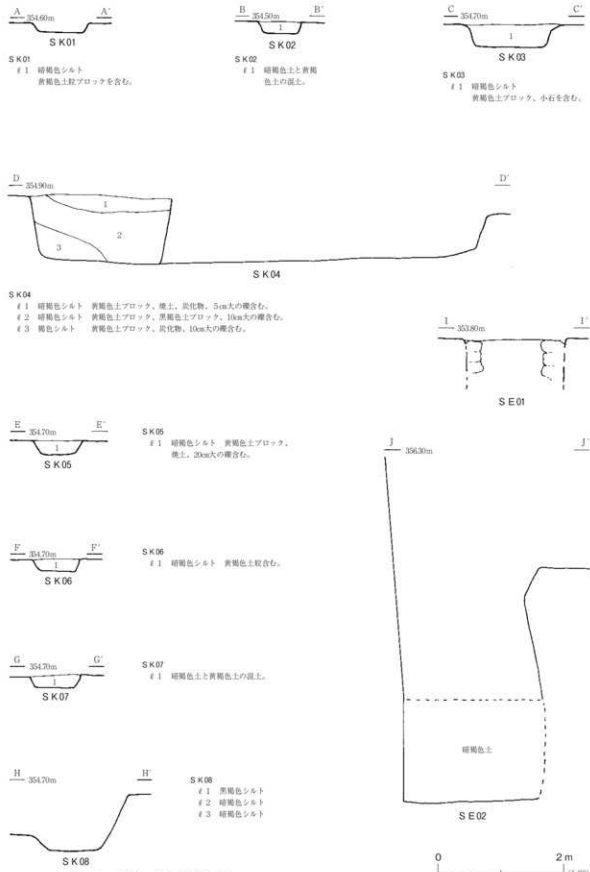


図4 土坑、井戸跡断面図

第2節 遺構と遺物

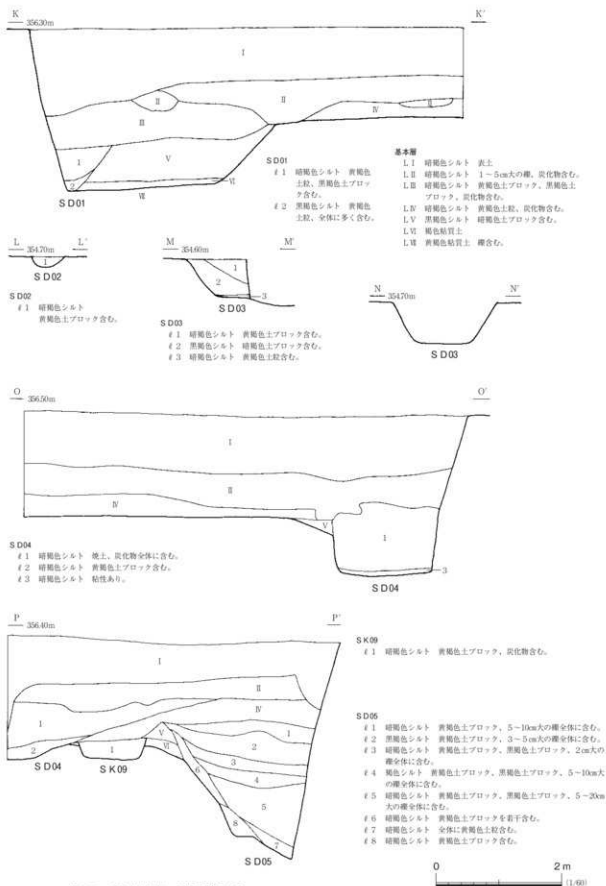


図5 基本層序、溝跡断面図

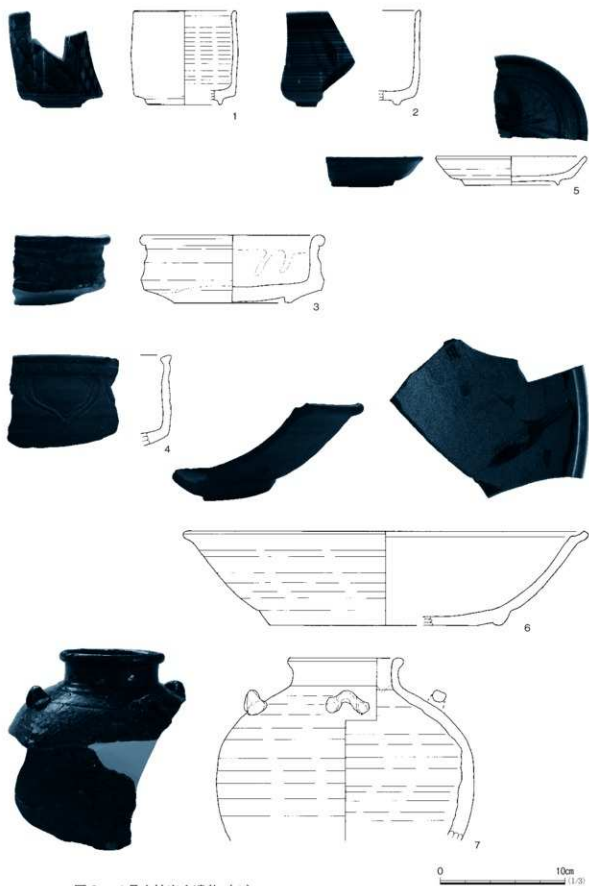


图6 4号土坑出土遗物(1)

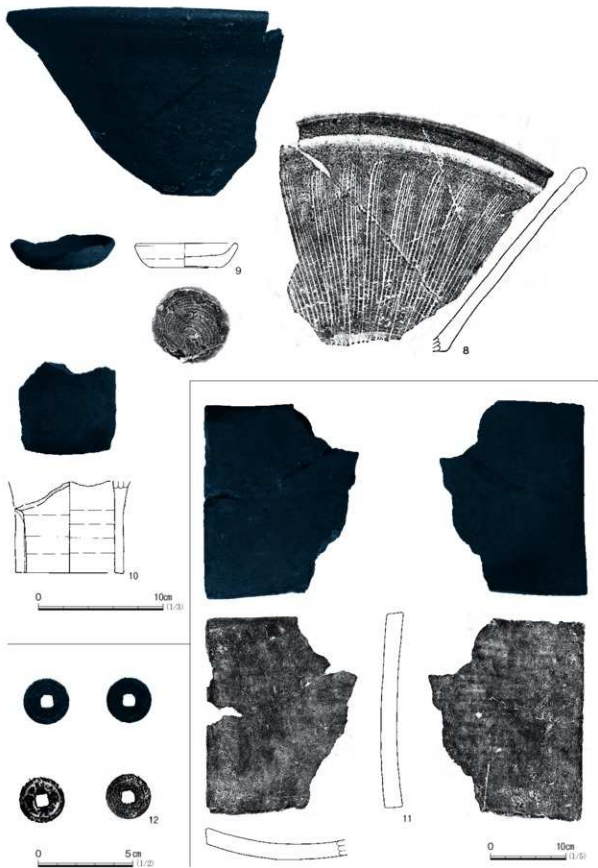


图7 4号土坑出土遗物(2)

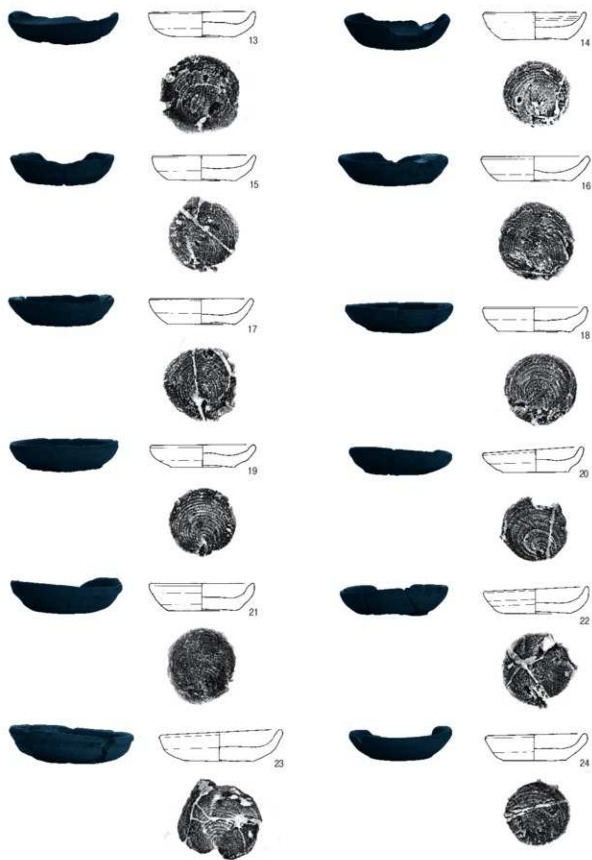


図8 3号満跡出土遺物 (1)

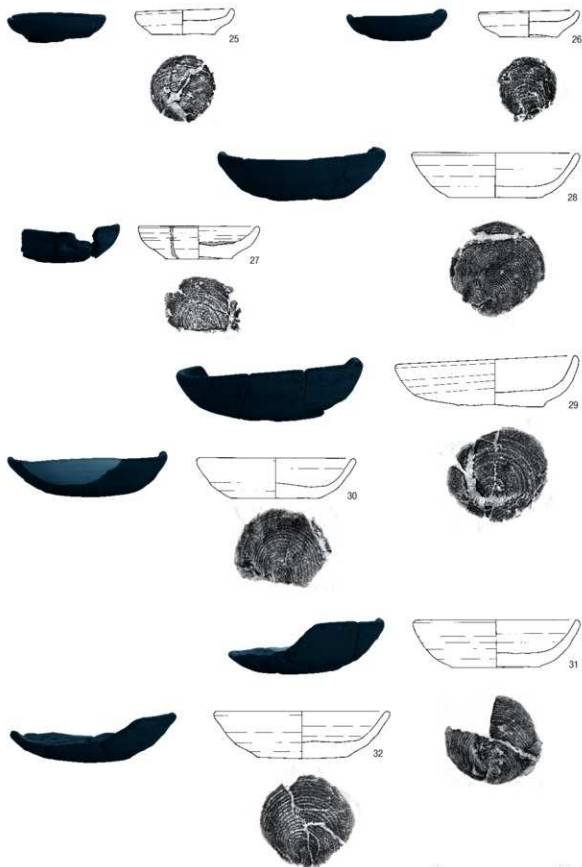


図9 3号溝跡出土遺物(2)



图10 3号满跡出土遺物(3)

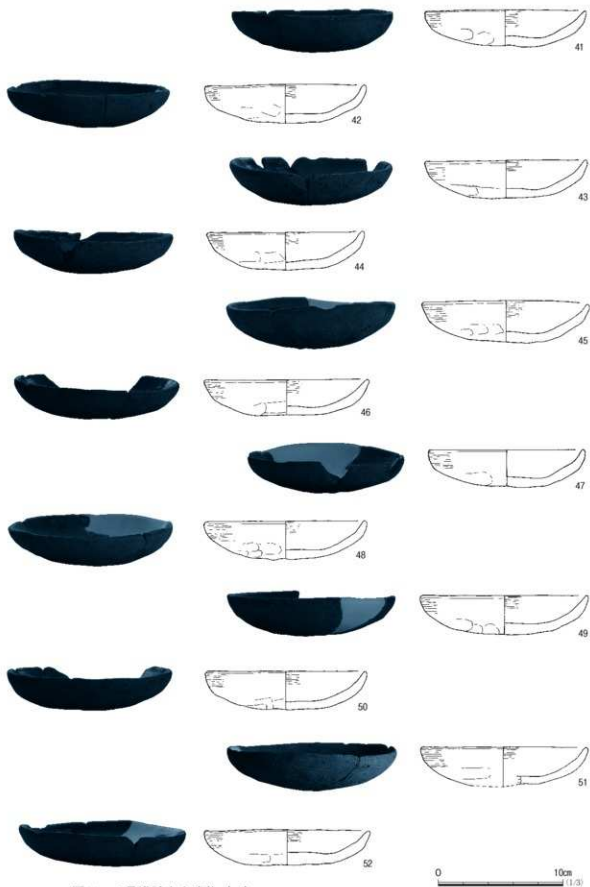


図11 3号溝跡出土遺物(4)

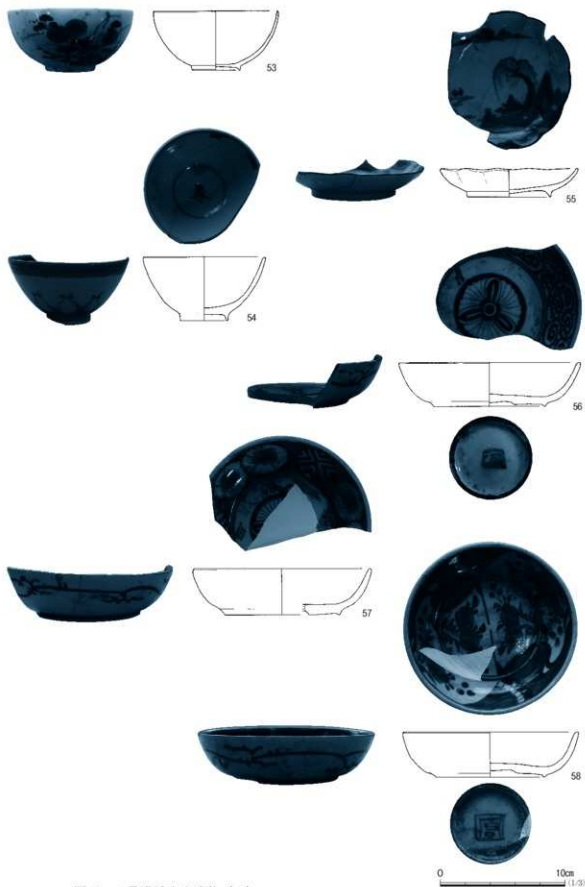


图12 4号满跡出土遗物(1)

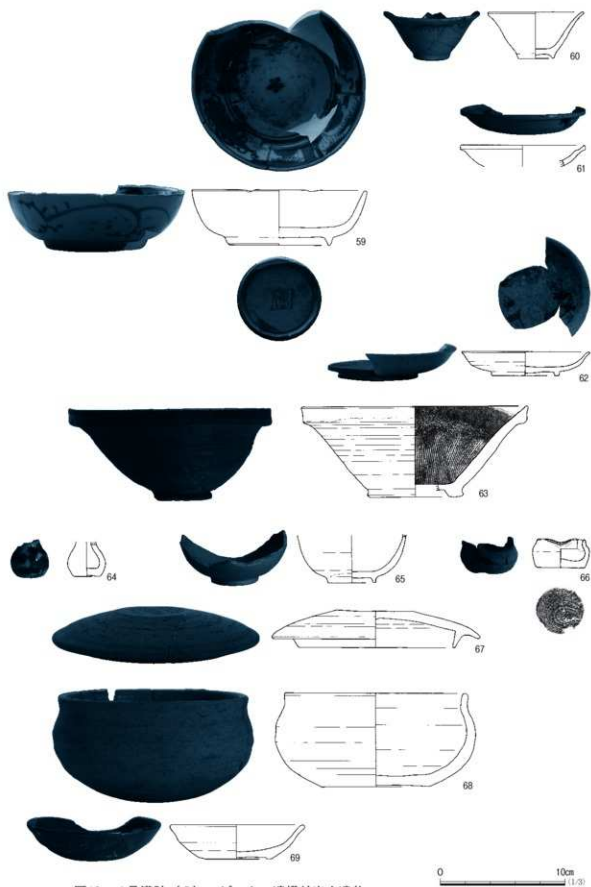


図13 4号溝跡(2)、ピット、遺構外出土遺物

図No	出土場所 層 位	種類 器種	遺存度 (%)			法量 (cm)			外面の特徴 内面の特徴	備考
			口	体	底	口径	口径	器高		
6-1	SK04 41	陶器 胡瓶 磁器 磁器	30	20	10	69.0	65.0	7.5	外面：二重溝槽で分割し、尖果文と花葉重文。 内面：無。	肥前
6-2	SK04 43	陶器 磁器	10	15	10	-	-	7.5	外面：莖文。 内面：無。	肥前?
6-3	SK04 43	陶器 香炉	20	20	20	140	92	54	外面：体部下半まで鉄輪。 内面：無。	
6-4	SK04 41	陶器 香炉	20	20	-	-	-	<72>	外面：鉄輪。焼熟している。 内面：無。	
6-5	SK04 41	陶器	25	25	25	11.9	7.4	2.3	外面：口縁部～高台まで施輪。 内面：鉄胎(紅紫)。	志野
6-6	SK04 43	陶器 大甕	20	20	20	13.6	18.0	7.5	外面：口縁～高台内まで施輪。焼熟。高台内に目取あり。 内面：施輪。鉄胎あり。目取あり。	
6-7	SK04 41・43	陶器 四耳壺	100	40	-	8.8	-	<146>	外面：耳3個あり。本末4個。鉄輪。 内面：全面施輪。	
7-8	SK04 41	陶器 磁鉢	20	20	-	-	-	<148>	内外面無輪。内面跡目線あり。	丹波
7-9	SK04 底面	土師質土器	45	80	100	7.8	5.6	20	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
7-10	SK04 41	土師質土器	-	-	30	-	8.0	<73>	外面：ロクロナデ。切り込みあり。 内面：ロクロナデ。	
7-11	SK04 41・43	平瓦	-	-	-	長25.8	幅19.6	厚21	四凸面ナデ。	
7-12	SK04 43	鏡裏	-	-	-	径2.3	-	-	「聖来元寶」	
8-13	SD00 43	土師質土器	60	65	100	8.2	5.4	19~21	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-14	SD00 42	土師質土器	55	55	100	8.0	5.2	21	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-15	SD00 43	土師質土器	75	80	100	8.0	5.2	19~21	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-16	SD00 43	土師質土器	90	100	100	8.2	5.8	19~20	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-17	SD00 43	土師質土器	95	100	100	8.0	5.4	20~21	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-18	SD00 43	土師質土器	100	100	100	8.0	5.8	19~20	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-19	SD00 43	土師質土器	100	100	100	8.2	5.0	17~19	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-20	SD00 43	土師質土器	70	75	100	7.8	5.2	16~20	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-21	SD00 43	土師質土器	65	75	100	8.2	5.4	2.2	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-22	SD00 43	土師質土器	80	85	100	8.2	5.8	18~21	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-23	SD00 43	土師質土器	95	95	100	9.6	5.6	20~26	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
8-24	SD00 43	土師質土器	70	70	100	7.8	5.0	20~22	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
9-25	SD00 43	土師質土器	95	95	100	7.6	5.0	18~21	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
9-26	SD00 43	土師質土器	50	65	100	7.8	4.6	19~21	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
9-27	SD00 43	土師質土器	30	40	65	6.4	4.2	2.6	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。内外面施輪あり。	
9-28	SD00 43	土師質土器	60	60	90	13.0	7.2	3.6	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
9-29	SD00 43	土師質土器	60	70	100	14.2	7.8	3.3~4.1	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
9-30	SD00 43	土師質土器	30	40	60	12.4	7.0	3.2	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
9-31	SD00 43	土師質土器	25	25	75	12.8	6.8	3.8	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
9-32	SD00 43	土師質土器	20	25	100	13.6	7.2	3.8	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
10-33	SD00 43	土師質土器	40	40	45	14.4	6.0	3.0	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
10-34	SD00 43	土師質土器	30	30	40	13.6	10.0	3.2	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
10-35	SD00 43	土師質土器	40	60	60	13.2	6.4	3.1	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	
10-36	SD00 43	土師質土器	15	20	95	13.0	6.8	3.3	ロクロ成形。外面底面同軸糸切り軌。	

表1 出土遺物観察表(1)

第2節 遺構と遺物

IDNo	出土場所 層 位	種類 器種	遺存度 (%)			法量 (cm)			外面の特徴 内面の特徴	備考
			口	体	底	口径	底径	器高		
10.37	SD00 f.3	土師貫土器 皿	30	35	60	130	66	29	ロケロ成形。外面底部割線糸切り痕。	
10.38	SD03 f.3	土師貫土器 皿	40	50	95	133	70	31~34	ロケロ成形。外面底部割線糸切り痕。	
10.39	SD03 f.3	土師貫土器 皿	30	20	-	132	-	<38>	ロケロ成形。	
10.40	SD03 f.3	土師貫土器 皿	95	-	100	124	-	31	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.41	SD03 f.3	土師貫土器 皿	100	-	100	126	-	25~30	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.42	SD03 f.3	土師貫土器 皿	100	-	100	126	-	31	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.43	SD03 f.3	土師貫土器 皿	90	-	100	128	-	30	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.44	SD03 f.3	土師貫土器 皿	90	-	100	124	-	30	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.45	SD03 f.3	土師貫土器 皿	95	-	95	130	-	34	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.46	SD03 f.3	土師貫土器 皿	75	-	100	130	-	27~28	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.47	SD03 f.3	土師貫土器 皿	75	-	75	122	-	30	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.48	SD03 f.3	土師貫土器 皿	70	-	70	126	-	31	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.49	SD03 f.3	土師貫土器 皿	45	-	100	132	-	29~31	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.50	SD03 f.3	土師貫土器 皿	75	-	75	126	-	30	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.51	SD03 f.3	土師貫土器 皿	95	-	70	132	-	31	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
11.52	SD03 f.3	土師貫土器 皿	80	-	100	130	-	29	素ロケロ成形。内外面ナデ。	
12.53	SD04 f.1	総器 丸瓶	50	50	50	98	38	47	外面：帯文文。 内面：帯文文。	肥前
12.54	SD04 f.1	総器 丸瓶	60	70	40	98	43	51	外面：帯文文。 内面：見込みに見出文あり。	肥前
12.55	SD04 f.1	総器 輪花皿	50	80	100	108	66	23	外面：口縁。 内面：模写山水文。	肥前
12.56	SD04 f.1	総器 輪花皿	20	30	60	114.0	88	3.5	外面：帯草文。底部方に縁取か？ 内面：模写草文。見込み三方割線草文。	肥前
12.57	SD04 f.1	総器 輪花皿	40	30	60	110.0	90	3.7	外面：帯草文。 内面：四角窓二重割線。帯輪形に花文。見込み三方割線草文。	肥前
12.58	SD04 f.1	総器 輪花皿	100	95	90	138	86	3.6	外面：帯草文。底部二重方に「四」の篆書体。 内面：花文。	肥前
13.59	SD04 f.1	総器 輪花皿	75	80	85	138	80	4.4	外面：帯草文。底部方角内に「身」か？ 内面：宝文と松竹梅文を対に置く。底面五弁花。	肥前
13.60	SD04 f.1	総器 小杯	55	70	100	76	28	3.7	外面：帯文	諸説！
13.61	SD04 f.1	砂石手 皿	70	20	-	98	-	<17>		会津 本郷
13.62	SD04 f.1	砂石手 皿	30	35	100	100.0	54	1.9	外面底部目取あり。	会津 本郷
13.63	SD04 f.1	陶器 椀鉢	35	40	20	178	172	7.2	口縁部灰釉。	
13.64	129 f.1	総器 小瓶	-	40	50	-	20	<28>	花文。	肥前
13.65	L.1	陶器 皿	-	40	100	-	38	<38>	灰釉。	相馬
13.66	L.1	土師貫土器 打物片	60	55	100	37	38	2.3	ロケロ成形。外面底部割線糸切り痕。油煙あり。	
13.67	L.1	土師貫土器 皿	100	90	100	126	95.0	3.0	ロケロ成形。	
13.68	L.1	土師貫土器 火油瓶	95	95	100	142	86	7.4~7.5	ロケロ成形。外面体部一底部同傾ヘラケズリ。	
13.69	L.1	陶器 皿	85	85	100	106	50	2.7~2.8	ロケロ成形。灰釉。	

表2 出土遺物観察表(2)

第4章 まとめ

今回の調査地点は、小峰城の三之丸にあたり、文化年間の絵図によれば「作事方」との表記のある一角にあたる。

確認できた遺構は、土坑・溝跡・井戸跡・ピットで、概ね江戸時代に位置付けられるものであるが、溝跡には白河藩成立以前の可能性が考えられるものも含まれている。

遺構から、江戸期における土地利用を明確に位置付けることはできなかったが、三之丸における調査例を総合的に検証することで、その具体像が明らかにできると考えられることから、今回明らかにできなかった点については、引き続き検討を加えたい。

写真図版



小峰城跡と中心市街地



調査区全景 (1)

①調査区西側 (南から)
②調査区西側 (南東から)



調査区全景 (2)

①調査区南側 (南西2-4)
②調査区南西側 (南西2-5)

図版4



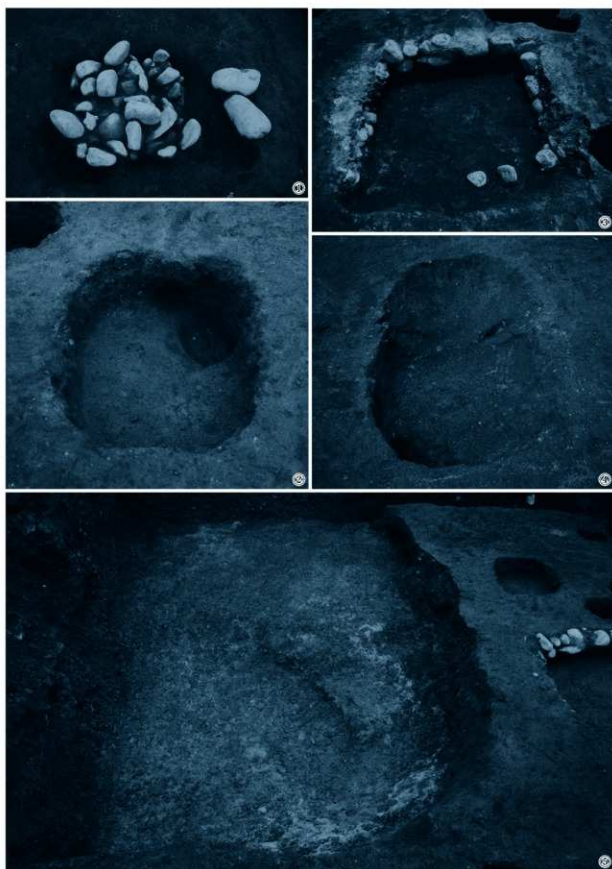
①



②

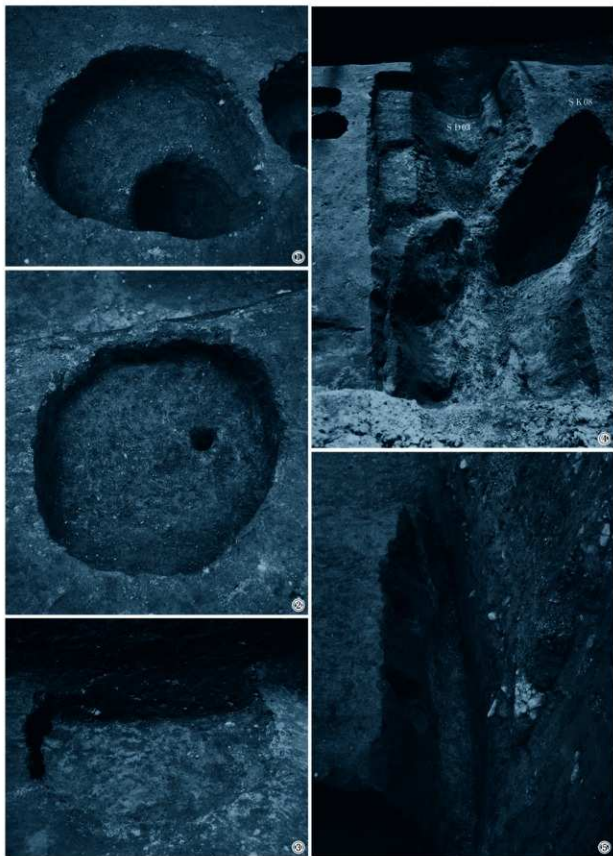
基本層序

①西側断面（北小5）
②南側断面（北小5）



1号~5号土坑

① 1号土坑 (西6-6) ② 3号土坑 (西6-6) ③ 4号土坑 (西6-6)
 ④ 2号土坑 (西6-6) ⑤ 5号土坑 (西6-6)



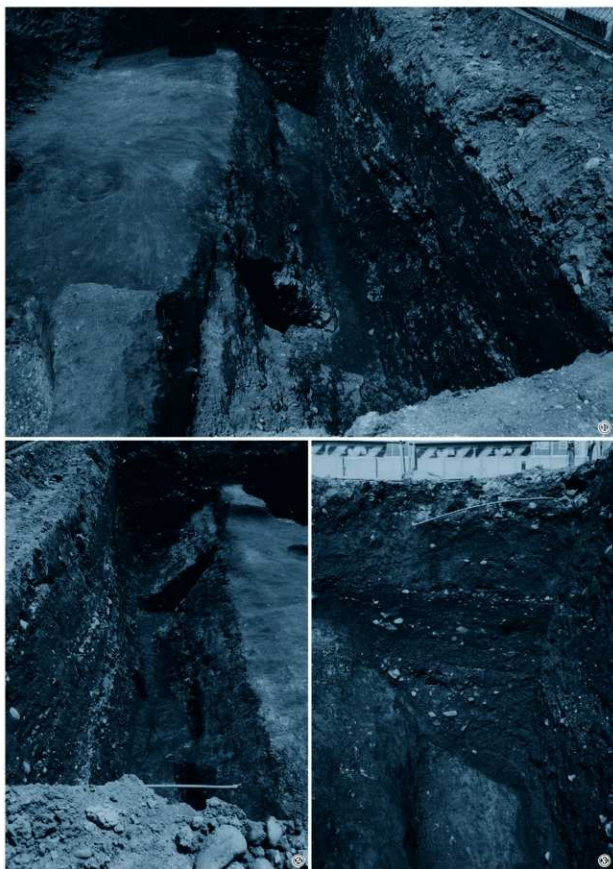
6号~9号土坑、1号·3号溝跡

①6号土坑 (南東から) ②9号土坑 (東から) ③1号溝跡 (南から)
④7号土坑 (東から) ⑤8号土坑、3号溝跡 (東から)



井戸跡

① 1号井戸跡 (東小石)
② 2号井戸跡 (南小石)



5号沟迹

①全景（東0-5） ③壕壁上（東0-5）
②全景（西0-5）

報 告 書 抄 録

ふりがな	こみねじょうあととはくつちようさほうこくしよ							
書 名	小峰城跡発掘調査報告書							
副 書 名	白河駅前区画整理事業に伴う調査2							
シリーズ名	白河市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第88集							
編 著 者 名	鈴木 功							
編 集 機 関	白河市							
所 在 地	〒961-8602 福島県白河市八幡小路7-1 TEL 0248-22-1111							
発行年月日	令和5年(2023)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こみね 城跡	白河市 大手町	205	9	37° 12' 86"	140° 21' 56"	1994.6.27～ 1994.7.26	263.55	土地区画 整理事業 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小 峰 城 跡	城館跡	中世 近世	土坑・溝跡・井戸跡 など	瓦・陶磁器・土師質土器		江戸後期の作事方の一角が明らかとなった。		
要 約								
<p>小峰城三之丸跡の南側は、近代以降東北本線の敷設、白河駅の設置により白河駅前を中心市街地として発展した。昭和56年に決定された「白河駅前土地区画整理事業」に基づき、平成元年度から事業が開始された。</p> <p>周知の埋蔵文化財包蔵地は、城郭の外堀までとなっており、当該地における開発に対して、現状保存、記録保存のための発掘調査の対応をとっている。</p> <p>今回の調査区は、江戸後期の絵図から、作事方との表記がある場所で、土坑や溝跡・井戸跡の存在が明らかとなり、土地利用の一端を明らかにできた。</p>								

白河市埋蔵文化財調査報告書 第88集

小峰城跡発掘調査報告書

—白河駅前区画整理整備に伴う調査2—

発行 白河市
〒961-8602 白河市八幡小路7-1
発行年月日 令和5年3月31日
印刷 (有)ワタベ印刷所
